

# 龍華山永慶寺の建築について

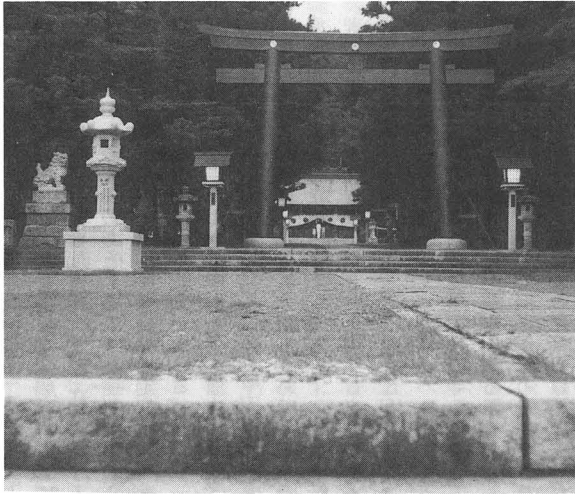


写真1 旧永慶寺あと護国神社

渡辺洋子

## 一 はじめに

江戸中期、宝永元年（一七〇四）から享保九年（一七二四）までの柳沢家領有期は近世甲府域下にとって繁栄の時代であるとされる。特に都市の整備、施設建設が行われ、物資の流通が活発化するなど、都市をとりまく生活環境は著しく向上した。のみならず仏教、特に禅宗に信仰の篤い柳沢家は府中近郊の岩窪村に菩提寺として龍華山永慶寺を造営している。

この寺院は柳沢吉里の大和郡山転封に伴って取り壊されたが、詳しく後述するように伽藍の建築は一部甲府近隣の他の寺院に移築されたと言われており、旧永慶寺の伽藍あとには現在護国神社が祀られている（写真1）。

柳沢家は大和郡山に転封のち、同名の寺をかの地に新たに設け菩提寺としたが、この郡山永慶寺に現在も岩窪村永慶寺伽藍の配置図面が残されている。赤岡重樹氏による同図の模写が現在山梨県立図書館に収蔵され、かつ池谷寛造氏が郡山永慶寺の了承をえて図面を二部複製化し、一部を山梨県教育委員会に寄贈、一部を自家保存

している。さらに池谷氏は「旧龍華山永慶寺」と題してこの配置図の史料紹介を『甲斐路』<sup>1)</sup>に行っている。同史料はきわめて重要な史料であり、本稿では以下「伽藍配置図」と呼ぶことにする。

また赤岡氏は旧永慶寺伽藍あとについて各建物のおおよその位置を推定した「永慶寺復原図」・「廃永慶寺推定復原図」を作成しており、現在山梨県立図書館に見ることができる。

さて、岩窪村に建立された永慶寺から他の諸寺に移築された建築のひとつと言われるのが、現在の甲府市古府中町、大泉寺の総門（惣門）である。この他にもかつて永慶寺から建築を移築されたという伝承をもつ寺が何ヶ寺かあるようである。多くは移築後に火災などの理由によって遺構を失ったというが、古府中町にある臨済宗寺院、禅林院の本堂は当時の建物が残されているらしいと伝えられ、建築史的調査を行う必要性が高い。

本稿では柳沢時代に造営された龍華山永慶寺を対象とし、第一にその造営の様相、および諸建築の形態を出来る限り明らかにすることを目的とする。さらに第二として旧永慶寺の遺構ではないかとされる現存建物の調査を行い、現状での建築記録を作成しながら、移築の可能性を探ることを試みる。以上に基づいて、前稿に引続き建築を通して柳沢領有期における甲府の文化的背景を深化してみたい。

## 二 龍華山永慶寺の造営

柳沢吉保は延宝五年（一六七七）徳川綱吉の小姓組であった二十歳の頃、臨済宗妙心寺派の江戸小日向龍興寺、竺印祖梵に参して以後、同じく雲巖全底、月桂寺碩秀らを師としていた。黄檗宗との出会いは元禄五年（一六九二）黄檗山萬福寺の第五代高泉との宗要問答に

始まる。川越城主となり、昇進を重ねる中にあって、高泉はじめ第六代千呆、七代道宗、八代悦峯と法要を論じ合い、時にかなりの批判をしつつも禅師たちとの親交篤く、ついに宝永六年（一七〇九）九月六義園において黄檗宗の受戒をした。法号は保山元養である。

この間宝永元年（一七〇四）に甲斐三郡の領主となり、翌二年には甲府の都市整備と甲府城の殿堂造営に着手した。と同時に菩提寺の建立を幕府に願いでいる。これが最初の寺名を穩々山靈台寺と称した、のちの龍華山永慶寺である。

吉保の菩提寺が宝永二年に造営を開始し、七年に完成されるまでの記録は現在奈良県大和郡山市の柳沢文庫に収蔵されている「龍華山御建立以来諸色書留 一」（写真2）によって知ることができる。この史料はおそらく宝永七年以降に、それまでの造営の記録をまとめて書き直したものと考えられるが、その記載には柳沢吉保の藩政記録である『楽只堂年録』、おなじく吉里の『福寿堂年録』から傍

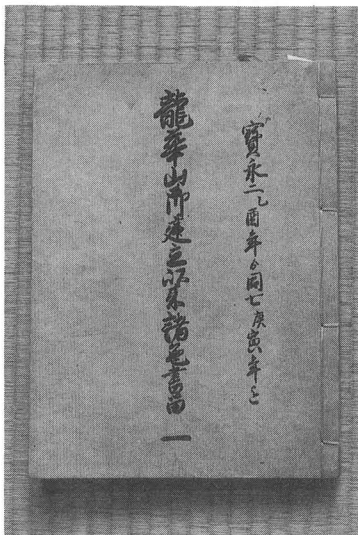


写真2  
『龍華山御建立以来諸色書留一』

証の得られる内容が多く、信憑性の高いものである。本稿ではこの史料を以下「諸色書留」と略称することにする。

宝永二年七月九日の記述に始まるが、甲州に寺院を建立するにあたり開山第一世として武州小日向龍興寺の故雲岩（巖）和尚を、第二世として同寺座元の東水の名を挙げてゐる。第一世の雲岩禪師はこの時すでに他界していた。また宝永六年の黄檗宗受戒以前であり、臨済宗の禪師を第一、二世とした点は注目される。

二年八月十九日に吉保の菩提寺を建立したいとの希望が上聞に達した。二十一日には菩提所の四隅に杭を打ち、二十四日には「靈台寺と御定」、その約三ヵ月後の十一月二十二日には地盤の構築である地形普請に取り掛かるとあり、十二月十三日に地形始め、奉行衆を選任している。またこの間十一月晦日には「岩窪村下積翠寺村之内寺領三百七拾石」の寄付について寺社奉行へ書面を提出した。

ところが宝永三年に入ると全く記載が見られず、四年には「御石垣御地形其外諸色御入用御勘定仕上々相済」とあるのみである。

宝永三年、获生徂徠は僚友田中省吾とともに甲府を訪れ『峽中紀行』・『風流使者記』を著している。柳沢吉保は靈台寺の碑文を自分で撰する予定であり、彼の儒臣である徂徠の旅行はその敷地視察も目的にしていた。同年九月、徂徠と省吾は靈台寺に歩を運んでいる。その時の様子は次の通りである。

二子遂詣<sup>ニ</sup>靈台寺<sup>一</sup>、營造之地、下大夫長谷近房及大橋某・安藤某・青木某等皆在、二子上<sup>ニ</sup>廠相揖寒温叙話、下視<sup>ニ</sup>民役雲聚材石峯積<sup>一</sup>・（中略）・周<sup>ニ</sup>一覽境内<sup>一</sup>、經始既設、基址漸成、盖闢<sup>ニ</sup>山腹<sup>一</sup>、而址者五層、其最高為<sup>ニ</sup>壽藏<sup>一</sup>、其次為<sup>ニ</sup>御崎神祠<sup>一</sup>、其次為<sup>ニ</sup>法堂<sup>一</sup>、其次為<sup>ニ</sup>門庭<sup>一</sup>、其次為<sup>ニ</sup>子院之地<sup>一</sup>、

### 開<sup>ニ</sup>方可<sup>一</sup>ニ一里許<sup>一</sup>

ここでは人々が雲のように集まって石材を積み上げ、地形が進められる様子が描かれている。營造の地にいた人物のうち、「諸色書留」中に地形の奉行として該当する氏名のあるのは、番頭長谷川半右衛門、目付大橋傳五右衛門、使者番青木清右衛門である。靈台寺の広い境内は五段の高さになっており、それぞれ建設されるべき建物の種類も計画されていたようである。後述する永慶寺の「伽藍配置図」には地盤高さが記録されているが、徂徠の記録に近く数段の高さにわけられ、入口から奥に向かって地盤が次第に高くなる敷地の状況がわかる。但し徂徠の訪問時には法堂などのちの史料に見えない建物の名も挙げられている。このようにして寺の地盤構築は進行していたようであるが、宝永三年は一方で甲府城の殿舎造営が多忙をきわめた年でもあった。

続く宝永四年になると十月には大地震、十一月には富士宝永山の噴火と、記録的な天災が相次いで起こった。これによって駿府城に被害がでるなどして政局の混乱が免れられず、前年一月大老職についていた吉保にとって、自身の菩提寺伽藍の造営はある程度の遅滞を避けられなかったように思われる。

翌五年四月十一日、地形の一応の完成によりその奉行衆は解任、かわって靈台寺建立の奉行を山口八兵衛、他二名に命じた。翌十二日には山城国黄檗山萬福寺の第八代悦峯禪師を開山祖に依頼した。同時に「改龍華山永慶寺」とあり、この日穩々山靈台寺から龍華山永慶寺と寺の名を変えている。先行研究には「宝永七年七月十五日に改名」とするものもあるようだが、造営記録にみる改名の日付はそれより二年以上早い。吉保の『衆只堂年録』巻二一八にも五年

四月十二日條に「駒込の下屋鋪に至りて悦峰和尚と議して穩々山を龍華山と靈台寺を永慶寺と改む」とあり、開山祖に依頼した悦峯と吉保が協議して名前を変更したらしい。この年八月になると寺領三百七十石が国許に通達された。

宝永六年三月十五日、江戸から駒込御用役の山崎孫助が唐様、すなわち禅宗様の絵図を持参し、黄檗役僧紫玉と黄檗大工の秋篠八右衛門、弟子の平野喜八郎をつれて到着した。そして十九日には永慶寺の楸初、新初が柳沢権太夫以下の立会いで行われた。この時の職人の構成を史料から次に記す。

永慶寺御普請御用相勤候諸職人

黄檗大工

秋篠八右衛門

八右衛門弟子

平野喜八郎

右兩人黄檗り罷越し御普請中相勤

大工肝煎 下山村

万右衛門

同

孫兵衛

同

久左衛門

府中

善兵衛

木挽請負

大西屋

忠左衛門

方丈書院 素建切組請負

江戸大工

庫裏寮舎

善兵衛

日用請方

井筒屋

勘右衛門

薦請方

孫助

荒物方請負

荒物屋

伊兵衛

石方請負

石屋

長右衛門

地形請負

石和町

彦次右衛門

城古寺町

庄右衛門

二嶋屋

四郎左衛門

鍛冶屋

駿州

留兵衛

屋ね請負

信州松本

七右衛門

瓦請負

瓦師

市兵衛

檜板子山出肝煎 飯留村

幸右兵衛

大工は宇治萬福寺の大工である秋篠家の者が担当し、彼らを中心に甲斐の下山大工および甲府の大工、江戸大工が参加している。また鍛冶屋は駿州、屋根職人は信州から来るなど周辺の広域から集めている。そして永慶寺の材料には檜が使用されたことも判る。

建設の工事は木材の木取り、刻みを中心に着々と進んだようで、六月には棟上げの方法をめぐって奉行の山口八兵衛から江戸表に御伺いの書面をだしている。それには5項目の質問があり、やや煩瑣になるが次の通りである。

①方丈、書院、寢室、甘露堂、庫裏、寮舎など三百六十坪余りの分の「素建切組」が終了したが、当月二十日頃より建て始めたい。その日取りをいつにするか、②仏殿の「切組」は当月末ころ大方終了の予定であるから、来月初めに「素建」してよいか、③黄檗大工秋篠八右衛門が言う萬福寺の棟上げと同様、永慶寺でも仏殿の棟上げによって上棟とするのか、④その方法は萬福寺の方式を簡略化し、上中の二仕形を計画したのでいずれかを選択してほしい、⑤棟上げの日取りをいつにするか、以上の内容である。これによって工事の進捗状態が詳細に判る。御伺いの結果、上棟の方式は中の仕形、棟上げは七月二日に決まり、挙行された。この時の棟札表の文言には

「新羅三郎後胤前国主四位少将源吉保朝臣菅建 甲斐国山梨郡龍華山永慶禪寺 宝永六年己丑七月二日上棟」とあり、奉行は柳沢権太夫源保格、副奉行は山口八兵衛源政俊、都料匠は秋篠八右衛門藤原憲之と記載された。

宝永七年五月になると大方建設が終了しつつあり、六月には黄檗役僧の紫玉らがきて見分をおこない、同二十八日には「御成就ニ付（悦峯）和尚入院之儀為請待御使者被差遣」とある。

このように開山祖を迎える準備を進める一方で、建設工事の完成により仏具、調度などが次々と運びこまれた。七月五日には吉保直筆の「永慶寺」の額字および悦峯直筆の「龍華山」の額字が江戸から到着したが、この時の吉保の書は別に柳沢文庫に収蔵されている。写真3・4に示す。「永慶寺」の額は天王殿に掛けられた。また二十四日には大鐘が鐘楼につられた。これらの準備も八月五日には「大概造畢」とあり、いよいよ開山組の悦峯道章が十日に甲府到着、柳沢吉里が出迎え翌日入院、十五日に開堂となったのである。

永慶寺に必要な仏具や調度は吉保の寄贈によるほか、京都、江戸、甲州の三箇所にかけて調達された。「永慶寺御用京都ニ而出来候分」、「江戸ニ而出来候分」、「甲州ニ而出来候分」として「諸色書留」には図とともに詳細な記録がある（写真5・10）。本尊の釈迦はじめ阿難・迦葉、韋駄天などの仏像、木魚や雲版などは京都、経覆や法被、茶碗などは江戸であつらえた。甲州で造つたものとしては家老柳沢権太夫寄進の大鐘、柳沢帯刀寄進の報鐘などが第一に挙げられているが、禅宗寺院に欠かせない魚棚や利竿の柱もあるのが興味深い。

写真3 額字の由緒



写真4 吉保直筆額字

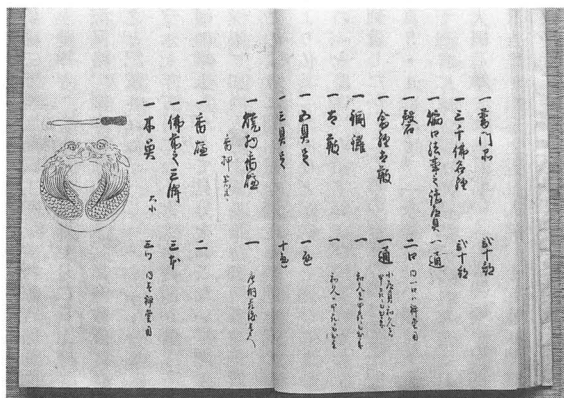


写真 5  
永慶寺御用京都二而出来候分

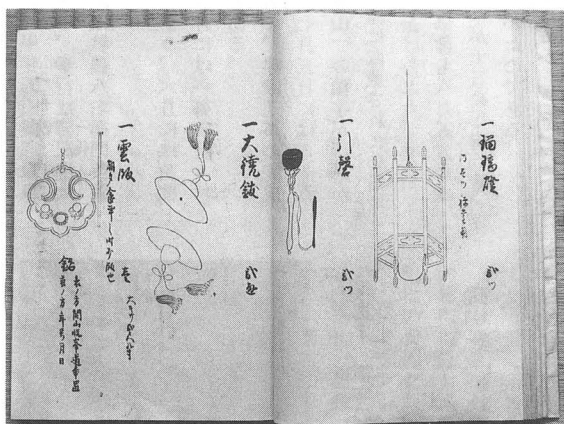


写真 6  
同 上

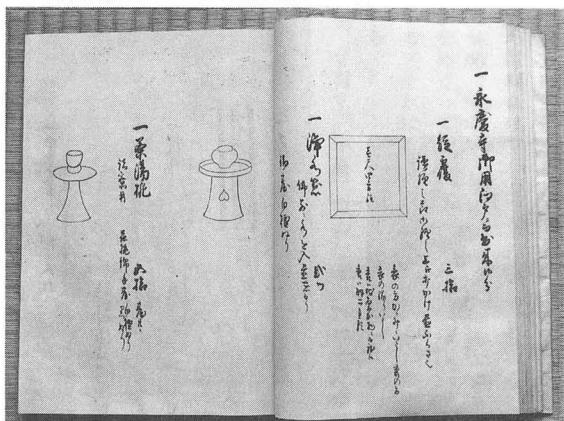


写真7  
永慶寺御用江戸二而出来候分

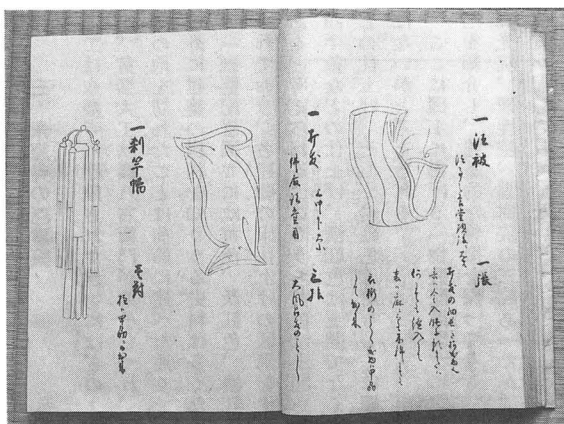


写真8  
江戸二而出来

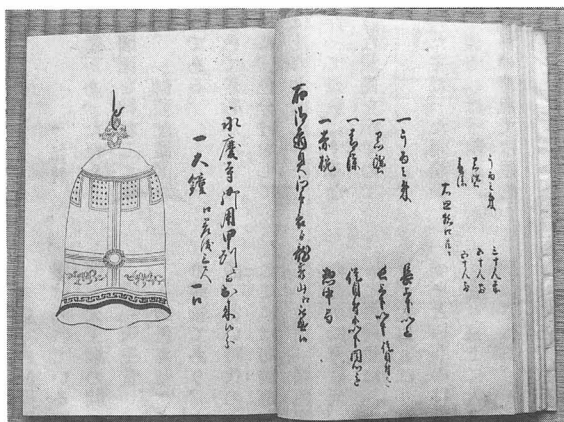


写真9  
永慶寺御用甲州二而出来候分

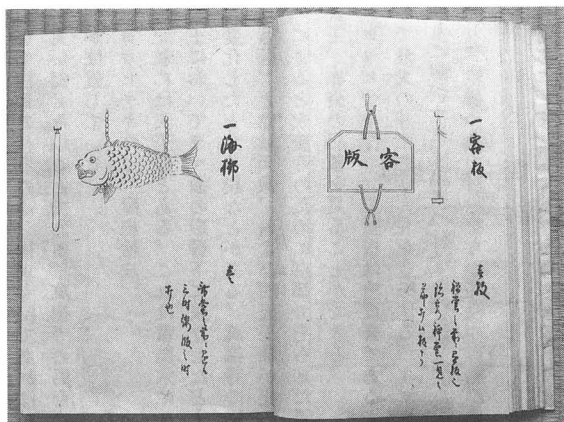


写真10  
同上

### 三 永慶寺の諸建築

では永慶寺に建設された建物にはどのような特徴があったのだろうか。黄檗大工秋篠八右衛門が弟子をつれ、唐様の図面を持参して甲斐の地を訪れたことは前節に述べた通りであるが、「伽藍配置図」以外に建築の様相を知りうる史料は多くないようである。

「伽藍配置図」には黄色、淡紅色、濃紅色の三色で着色がほどこされており、各建物の床仕上げの区別をするために、色分けをしてあると考えられる。このうち黄色は土間あるいはその上に瓦や石で四半敷などの仕上げ、淡紅色は土間でなく床を作って畳敷にするなどの仕上げ、そして濃紅色は壇もしくは棚のような設備を示すのではないかと考えられる。

ここに図1に掲げる「伽藍配置図」に記載された主だった諸建築名を紹介し、建築的な特徴を探ってみる。なお永慶寺には子院が、真光院、理性院、靈樹院の三院あったが、この史料の時点では建物位置が記録されていない。

史料的な制約が多いため、永慶寺伽藍の規範となった萬福寺<sup>(1)</sup>の建築と比較しながら分析をすすめる。参考のため京都宇治萬福寺の伽藍配置図を図2に示す。

#### ①「惣門 屋根瓦」

永慶寺の「伽藍配置図」では八脚門の平面が描かれている。ところが五節に後述するように、永慶寺からの移築ではないかとされる総門は大泉寺に現存する門も、また写真にみる遠光寺の門も四脚門なのである。これらの門は萬福寺の総門と同じ形式である。

総門のすぐ近くには腰掛け、および看門寮が設けられている。

永慶寺の配置図において注目されるのは、禪宗寺院であれば必ず設けられている三門が見いだせないことである。萬福寺の場合は総門と天王殿の間に三門が位置している。

#### ②「天王堂 大舩エヨウヒデギ作り 屋根檜皮」

「諸色書留」による記載には天王殿とある。これは黄檗宗に独特の建物であり、中国本土においてラマ教の影響下に成立したとする説、古い時代の中門が変化したとする説などがある。萬福寺の場合ここには布袋尊（弥勒菩薩）と韋駄天像、および四天王像が祀られている。「諸色書留」によると永慶寺のために京都でそろえた諸像のなかに韋駄天、四天王、布袋の記載を見ることができると。

この建物は「大舩エヨウヒデギ作り」で屋根は檜皮葺であるという。大舩とは斗組の中で最大の斗である大斗<sup>だいと</sup>を意味する。エヨウヒデギというのは言葉通りに解釈すれば絵様の付けられた肘木<sup>ひじき</sup>を指す。つまり柱上に大斗がのり、絵様つきの肘木をもつ斗拱の形態がまず想像される。

ところで京都の萬福寺について、黄檗大工秋篠家の文書中に木割書（年不詳）が残されているが、興味深いことに萬福寺天王殿の平面図には「てんわうてん 桁行五間 梁行四間 大斗あやうひち木つくりやねひわたふき」と書かれている。「伽藍配置図」による永慶寺の天王殿の平面は、建築の規模こそ現在の萬福寺のものより小さかったようだが、柱および須弥壇等の配置は萬福寺の木割書とよく近似している。のみならず他の建築の特徴も非常に良く似通っていたようである。

萬福寺の天王殿（正面図Ⅱ図3）を構成する柱のうち小屋組まで延びる内部の4本を除くと、他は柱頭に大斗をおき出三ツ斗組の肘





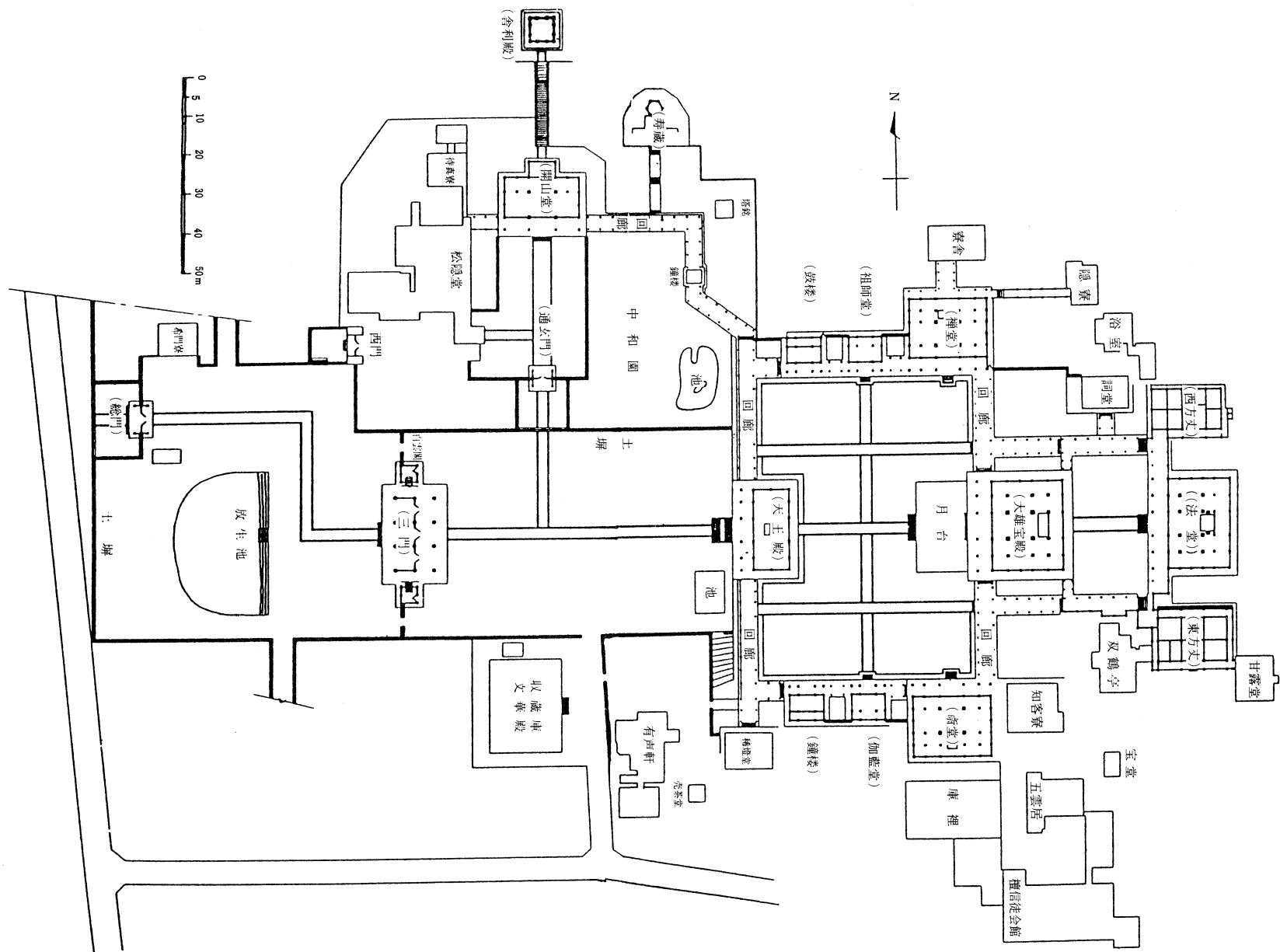


圖 2 萬程寺伽藍配置圖

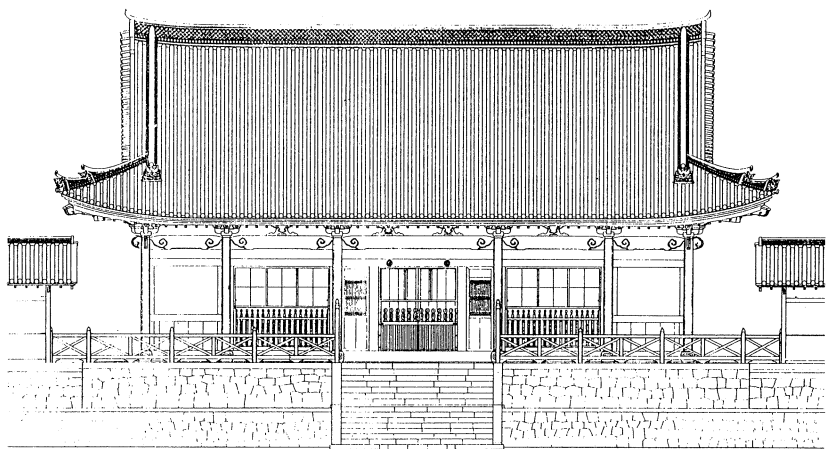


図3 萬福寺天王殿正面図

木を支えている。中備には蓐股なかぞなえを置くが、これが多少特殊で上に斗がのらず、実肘木みでしきと蓐股が合体したような形態をしており、絵様が付けられている。萬福寺天王殿の修理工事報告書によれば、「中国的な建物という事で、このような形式のものを作成したようである。」とあり、萬福寺の建築にとって特徴的な要素として捉えられている。この実肘木つき蓐股が木割書にいう絵様肘木(5)なのではあるまいか。図3を見ると、虹梁こうりやうより上の位置で大斗と「絵様肘木」が交互に繰り返し配置されていることになる。

おそらくは永慶寺の天王殿も大斗と「絵様肘木」をもち、萬福寺とはほぼ同じ様な組物の構成をしていたのではないだろうか。

なお萬福寺天王殿木割書には檜皮葺とあるが、この建物は寛文八年（一六六八）の創建当初から本瓦葺であった。

③「鐘楼 舛形作り 但二軒 屋根二重 檜皮」

鐘楼は文字どおり鐘のための建物である。屋根二重というのは普通鐘楼によく見られるように一重屋根に裳階もてあがりのついた形態を指すのではないだろうか。舛形とは斗の意味であるから、斗拱が組まれ、屋根は檜皮葺、垂木は地垂木・飛檐垂木ひえんで構成される二軒ふたのきであるという。

④「仏殿 七間半 九間 二重屋根作り 但 上下舛形作り 軒二軒垂木 重垂木 屋根檜皮」

この建物には梁行、桁行の間数が載せられている。七間半という表現があるので、この記載は柱間の個数を数えたものでなく、実際の寸法を指していると思われる。これにより図面の縮尺が判明し、他の建物の規模も知ることができる。但し、次節に述べる大泉寺への仏殿移築史料において記載された間数は「六間半・九間半」で、梁

行、桁行ともに異なっている。

二重屋根とあるのは鐘楼と同様、裳階つきの屋根を指すのではないだろうか。舛形作りとは斗拱を意味する。檜皮葺の屋根と裳階の両方を斗拱で組み上げた形態は禅宗様の仏殿として他にもよく知られている。軒は地垂木・飛檐垂木の二軒で、垂木を密に配置した繁垂木であるという。

萬福寺における仏殿、大雄宝殿は伽藍の中心的存在で、規模も最大であるが、永慶寺の仏殿も「伽藍配置図」中最大の建築である。

#### ⑤ 「ゲツタイ」

月台と書き、仏殿の前に設けられた一種のテラスであり、回廊で囲まれた中庭の地盤面よりも高くなっている。元来中国建築のもので、主要な建築には大抵設けられている。黄檗宗の伽藍の中でも中国的な要素といえる。

#### ⑥ 「齋 堂」

齋堂は食堂で、禅堂と対照的な位置にならび、仏殿、天王堂（殿）とともに回廊で連絡されて伽藍の中心をなす。萬福寺も同じ配置をとる。齋堂がこの位置にくるのは他の日本の禅宗伽藍にはない特徴である。

#### ⑦ 「大 クリ」

庫裡とは台所である。永慶寺の場合、齋堂に直結して設けられた厨房としての大庫裡と、方丈の先に設けられた奥向きの小庫裡とがある。

#### ⑧ 「禅堂 エヨウヒヂキ作り 屋根檜皮」

禅堂は座禅をおこなう堂宇である。天王殿と同じ絵様肘木の記載があるが、「大舛（斗）」とは付記されていないので、天王殿とは

異なる構成であったと考える。

⑨ 「イン寮」 ⑩ 「シスイリヤウ」 ⑪ 「エンジュ堂」 ⑫ 「タンキヤリヤウ」 ⑬ 「フウスリヤウ」 ⑭ 「シカリヤウ」 ⑮ 「寺社リヤウ」 ⑯ 「アンジャリヤウ」

隠寮、延寿堂（寮）、旦過寮、副寺寮、知客寮、侍者寮、行者寮など、諸寮舎である。隠寮とは住持職を引退した禅僧の隠居所であり、延寿堂は病僧が療養のために休養する建物、旦過寮とは永慶寺を訪れる雲水行脚僧を宿泊させる施設である。また、副寺とは禅寺で住持を補佐する六知事の一を意味し、かつ知客とは禅寺において客を接待する役僧、侍者とは住持の給仕、補佐をする役、行者とはさまざまな雑役をする僧をそれぞれ指している。⑬から⑯はその各々の寮舎である。

「伽藍配置図」には位置が示されていないが、「諸色書留」中には他に巡照堂、貼庫寮、知浴寮、直歳寮などの記載が見られる。

#### ⑰ 「シダウ 破風作り」

「諸色書留」中の祠堂という記載に一致する。祖先の霊を祭祀する堂宇であり、「伽藍配置図」中には濃紅色の着彩による位牌置壇かと思われる設備が描かれている。破風作りとあるので、建物屋根に破風がつけられた形態と考えられる。

#### ⑱ 「方 丈」

#### ⑲ 「シンシツ」 および 「カンロウドウ」

#### ⑳ 「書 院」

方丈とは住持の居間、書院とは書斎あるいは学問所を指す。ここでも最も注目されるのは通常禅宗寺院において伽藍中心軸上、仏殿の後方におかれるべき法堂（ほうどう）が見いだせないことである。

前述の获生徂徠による霊台寺の地形記録には五層になった境内地のうち、ちょうど真中の段が法堂の場所だといっている。しかし徂徠が造営の地を訪れた宝永三年には建物の建設がまったく開始されておらず、六年三月まで黄檗大工による絵図も届けられていない時期であるから、「伽藍配置図」の方が信憑性が高い。「諸色書留」中にも法堂の名は見つからないのである。法堂は他宗にとつての講堂にあたる仏法を講ずるための建物である。柳沢家の菩提所であった性格からか、後者二点の史料に示される時点で永慶寺には法堂がなかったようである。

仏殿より奥は方丈を中心とする領域であり、方丈、寢室、書院のそれぞれが別棟になり廊下で連絡されている。図面の着彩からすると伽藍を構成している仏殿、齋堂、禪堂、天王堂（殿）などは基本的に土間床に四半瓦敷などの仕上げであったと考えられるが、その一方で方丈など奥向きの建物は小庫裡をのぞいてすべて床が貼られていることが判る。

永慶寺伽藍に見あたらない法堂は通常床をもたない建物であるので、方丈とは全くしつらえの異なる施設であるが、寢室と書院が方丈から独立しているのを見ると、方丈に機能上多少は法堂的な性格があったのかもしれない。萬福寺においては法堂を中心として、東方丈および西方丈をその両翼に配置している。

カンロウドウとは「諸色書留」中記載の甘露堂を指すと考えられる。甘露とは不老を得られる天酒のことで、転じて不死涅槃の理想境をいう。永慶寺の甘露堂は寢室から廊下つたいに行くことが出来るが、萬福寺の甘露堂は東方丈の北に設けられている。

さて、宇治萬福寺の伽藍は寛文元年（一六六一）から三年に法堂、

方丈、禪堂が建立され、同八、九年に大雄宝殿、天王殿、齋堂、鐘樓、鼓楼、伽藍堂、祖師堂が、延宝六年（一六七八）に山門、元禄六年（一六九三）に総門が次々と数期にわけられて建設され、伽藍が完成した。

一方永慶寺では「諸色書留」に見る限り、宝永二年に計画が持ち上がってから七年に上棟されるまで多少の遅延はあっただろうが、「伽藍配置図」にあるおおよその建物は、基本的に一斉に建築されたらしい。これは一八世紀初期、すでに完成していた萬福寺の伽藍を手本としたところによると考えられる。

#### 四 永慶寺仏殿の大泉寺への移築について

さて永慶寺伽藍を構成していた建築のうち他の寺院に贈られたことが文献から明らかな建物がある。大泉寺に譲渡された仏殿である。甲府市古府中町にある大泉寺は、武田信虎によって大永年中（一五二一〜二八）に創建された武田家菩提所の由緒をもつ曹洞宗寺院である。寺域も広く、現在も二十三カ寺の末寺がある古刹である。

ところで柳沢家が大和郡山に転封になって後の永慶寺破却について『甲陽柳秘録』は次のように述べている。

……此度吉里公和州え所替に付當寺を破却に究りしかは、前濃州大守吉保公の尊骸を掘出し恵林寺え送る、享保九甲辰年四月十二日夜に入て密に送りける、家中諸士家老柳沢権太夫を始め歩行に供す、當寺破却者四月三日より凡四十日余り也、惜哉善盡し、金堂には釈迦阿難伽葉の唐佛を安置す其外天王殿、法堂、鼓楼、祖師堂、鐘樓、禪悅堂、位牌堂、花嚴堂、僧坊浴堂、惣門に至迄一字も不殘破却す有様目も當られぬ事ともなり、本堂は大泉寺え被送、殘堂は

寺僧に被遣し故所方へ引、跡は狐狸塚と成ける……（以下略）

ここで大泉寺に送られた「本堂」というのは、その前に述べられた「金堂」、すなわち仏殿を指すに他ならない。破却されたとして列挙されている建物のうち、天玉殿は天王殿のことであろうが、法堂、鼓楼、祖師堂および花嚴堂は前述のように「伽藍配置図」および宝永七年までの「諸色書留」には見いだせない。『甲陽柳秘録』の記録の誤りという可能性もあるが、宝永七年の佛殿上棟以後享保九年までの間に、これらの建物が伽藍に新たに加えられたとも考えられる。なお『甲斐国志』中の永慶寺伽藍、破却の記事は多く『甲陽柳秘録』に依拠しているようである。

さて大泉寺は永慶寺破却の翌年、享保十年（一二二五）に仏殿を再建するため募化牒を発行している。『佛殿重興募化牒』（山梨県立図書館甲州文庫蔵・写真11）と題されたその史料は漢文で書かれ、表紙裏に佛殿の正面姿絵が書かれている。しかも木版刷りにして発行されているところを見ると、かなり広範囲に配布することを目的



写真11 『佛殿重興募化牒』

としたらしい。題目には「募<sub>下</sub>建<sub>二</sub>大泉禅寺佛殿<sub>一</sub>縁<sub>上</sub>疏」とある。

内容は、大泉寺が武田信虎によって創建され、信玄の伯父を第二世とし七堂を誇ったことに始まる。その後織田信長によって廃寺となり、ようやく復興されたものの「未<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>」古者佛說法堂僧堂也」つまり佛殿、法堂、僧堂がまだ旧来の状況に戻っていないとある。

次に柳沢甲斐守の転封によって永慶寺が廃され、「百字盡毀<sub>二</sub>于買客之手<sub>一</sub>」という顛末になったが、佛殿だけは保山公が万感の思いをこめた大殿なので破毀するにしのびず、「遂見<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>進于當山<sub>一</sub>也」大泉寺に寄進された。この先の記述を以下に記す。

身老任重不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>之而辭去<sub>自</sub>爾以來四來見聞者莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>感也<sub>山僧自</sub>去<sub>レ</sub>秋退<sub>二</sub>相州長泉<sub>一</sub>來<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>山之日<sub>上</sub>目触心慘寢食弗<sub>レ</sub>寧<sub>思</sub>今吾當<sub>レ</sub>任使<sub>二</sub>其捨而朽<sub>一</sub>者人其謂<sub>中</sub>我何<sub>上</sub>乎<sub>是</sub>以奮志謀<sub>下</sub>募<sub>レ</sub>緣兼<sub>二</sub>法堂僧堂于佛殿<sub>一</sub>復<sub>中</sub>建<sub>上</sub>之<sub>豫命</sub>工移<sub>二</sub>正三門<sub>一</sub>而於<sub>二</sub>其跡<sub>一</sub>築<sub>レ</sub>梵<sub>二</sub>石欲<sub>下</sub>至<sub>二</sub>丙午春<sub>一</sub>造<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>殿於<sub>二</sub>殿左右<sub>一</sub>各翼以<sub>レ</sub>游<sub>レ</sub>廊而上達<sub>二</sub>於衆寮與<sub>中</sub>齋堂也<sub>且兼</sub>禪<sub>二</sub>堂以<sub>レ</sub>見<sub>下</sub>常居<sub>二</sub>行僧<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>怠<sub>二</sub>誦經弁道<sub>一</sub>而少<sub>二</sub>林春<sub>一</sub>花開<sub>二</sub>不萌枝<sub>一</sub>鶯<sub>レ</sub>嶺秋<sub>二</sub>月照<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>底池<sub>上</sub>也雖<sub>レ</sub>然難<sub>レ</sub>及<sub>自</sub>力遣<sub>二</sub>化僧並旦越<sub>一</sub>國中不<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>縑素之大家小家<sub>一</sub>托<sub>レ</sub>鉢次第行<sub>二</sub>乞事出<sub>一</sub>於急迫<sub>二</sub>情出<sub>一</sub>於血誠<sub>一</sub>何暇<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>勢之不<sub>レ</sub>為者與<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能者乎<sub>照</sub>臨此奮志<sub>二</sub>幸為各出<sub>一</sub>一手<sub>共挾</sub>一<sub>葦艸</sub>俾<sub>二</sub>殿<sub>一</sub>宇臨而獲<sub>二</sub>復少<sub>一</sub>林寂又反<sub>二</sub>覆則佛坐<sub>一</sub>殿<sub>二</sub>裏法唱<sub>一</sub>法<sub>二</sub>堂僧居<sub>一</sub>僧<sub>二</sub>堂三密各得<sub>一</sub>其所<sub>一</sub>自然從<sub>二</sub>上物体现前今日曳<sub>一</sub>石搬<sub>二</sub>土皆打<sub>一</sub>開<sub>二</sub>靈<sub>一</sub>山之一會<sub>一</sub>詎可<sub>二</sub>以待<sub>一</sub>齋魯變<sub>二</sub>乎夷為<sub>一</sub>無量之功德<sub>一</sub>也謹疏

甲州府中

大泉寺

享保竜宿 乙巳孟夏

この文章による建築的な要点をまとめると①享保九年の大泉寺住持が永慶寺仏殿、月台および大庭の石を「陥ッテ」すべて移してきたが、老身のため再建しないまま辞去した、②次の住職が九年秋に大泉寺に着任以来、放置するに忍びず、法堂・僧堂を仏殿に兼ねての再建を計画する、③職人に命じ三門を移設してその跡に礎石を築き、翌十一年春をもって仏殿を再建し、左右に游廊を延ばしてやがて衆寮と齋堂に到達するようにしたい、④その計画のために国中聖俗を問わず協力を要請する必要がある、ということになる。仏殿の再建は仏・法・僧のそれぞれをあるべき位置に置くことになり、仏殿の石をひき土を運ぶことは「皆靈山の一会を打開」し「無量之功德をなす」としている。

最も注目されるのは、仏殿の再建を計画してこの募化牒を発行した享保十年の住職が、仏殿の再興のみならず、その左右に回廊をめぐらし衆寮、齋堂に連結するという伽藍構想をもっていたことである。

ここで募化牒の表紙裏につけられた仏殿の正面姿絵（写真12）に注目しよう。「大佛殿之図 高五丈七尺 横九間三尺 堅六間三尺 柱三十二本 唐戸間六間」と付記されている。近世における正式な建築立面図である建地割りとは異なり、同図はあくまでも「絵」である。まず大棟の上ののる宝珠や、軒隅から下げられた風鐸が実際よりずっと大きい比率に誇張されて描かれており、また大棟の両



写真12 大仏殿之図

端の鬼瓦の表現など見ても明らかである。だが三節に前述した仏殿の特徴はこの図によってかなり具体的になる。

屋根は一重に裳階つきで、上下に斗拱が組まれている。「伽藍配置図」にも記載されていたこの基本的な構成はまず間違いないと思われる。他に記載されていた「軒二軒垂木 重垂木」、即ち軒が地垂木・飛檐垂木の二軒で、垂木配置が繁垂木であるという部分まではこの図からは判らない。また「伽藍配置図」によれば佛殿の全面一間はそのまま左右の回廊へとつながるため、萬福寺の大雄宝殿のように吹放ちになっている可能性があるが、姿絵の表現で吹放ちがあるように描かれていない。比較参照のため萬福寺大雄宝殿正面図を図4に付す。

旧永慶寺仏殿の軸組は裳階下桁行5間（柱間）、身舎桁行3間で

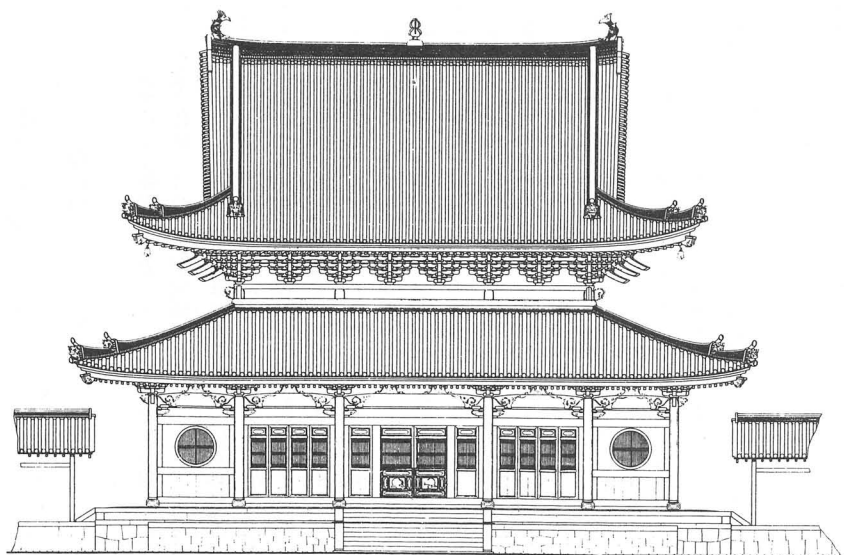


図4 萬福寺大雄宝殿正面図

柱には頭貫、飛貫が通り、頭貫からは木鼻が抜けている。さらに一番外側の柱間には各々腰貫が入り円窓が設けられている。その内側は棧唐戸の表現になっていて、これらは大雄宝殿と同じである。ところが中央柱間には扉などが何も描かれていない。仏殿の正面中央であるだけに、ここが壁であるとするのが奇妙である。

柱の礎石は萬福寺の角柱礎石とまったく同様の意匠であって、後述する大泉寺総門に現在使用されている礎石も同じである。従って円柱でなく角柱であろうと考えられ、上棟には粽ももぎがつけられることも萬福寺の柱と同じである。

裳階下では、柱の上に三ツ斗をおき、実肘木らしいものを支えているが、この表現はかなり簡略化されているらしい。三ツ斗の支える横架材は実肘木・通肘木とも丸桁ともつかない一本きりである。また柱5本のうち2本は何と粽のついた上端に直接間斗はと束をのせており、実際の建築形態がこの通りであったとは考え難い。かつ裳階下の組物が図の通りなら、斗拱は出の全くない平三ツ斗ということになるが、柳沢吉保の「大殿」にしてはきわめて禁欲的な意匠である。

裳階上の組織は一見すると一手先の三ツ斗である出組に見える。繰りの大きい実肘木を支えている。禅宗様仏殿に用いられる詰組とはせずに、中備には間斗束をおく。また、やはり禅宗様仏殿の特徴である反りの強い尾垂木がまったく描かれていないので、全体的におとなしい外観を呈している。

この図によって多くの建築の情報を得ることができるが、以上のように細かい疑問点もかなり多い。それはこの図が描かれた時点、即ち募化牒が板行された時に永慶寺仏殿がすでに解体されたあたりだっ





移築ではないかと言われている。現存する建物を調査する必要があるようにである。

## 五 大泉寺総門、遠光寺表門、および 禅林院本堂について

先行研究を調べると、旧永慶寺総門の移築ではないかといわれる門は二棟あるようであり、いずれも黄檗宗萬福寺の総門と同様のいわゆる「牌楼」に似た形式をとり、中央で屋根が高く持ち上げられた二段切妻の構造である。

一棟は甲府市伊勢町の日蓮宗寺院、遠光寺の表門である。この門について『山梨百科事典』には、「山門は柳沢甲斐守が甲府城の門を永慶寺に移し、さらに永慶寺をこわす際遠光寺に贈ったというが、これも空襲被災した。」と記載されている。ここで言う山門とは、『甲斐国志』中「宝塔山遠光寺」の項にある表門のことである。この門は第二次世界大戦の戦災によって焼失し、現在に残っておらず、残された写真で形態を確認できるのみである。

もう片方の門が大泉寺の総門（写真13）である。これについては『甲府市史 別編Ⅱ（美術工芸）』に「このような由緒のある寺に、甲斐国守となった柳沢吉保が宝永二年に創立した永慶寺の総門が移建されたということには誠にふさわしい措置であった」と記載されている。

では旧永慶寺に似たような形態の門が二棟あったのだろうか、遠光寺にあった門は永慶寺の総門ではなく、三門（山門）からの移築だったのだろうか。永慶寺に三門があったにせよ、萬福寺の事例などから総門と三門は形態をまったく変えて造られたと推察するのが

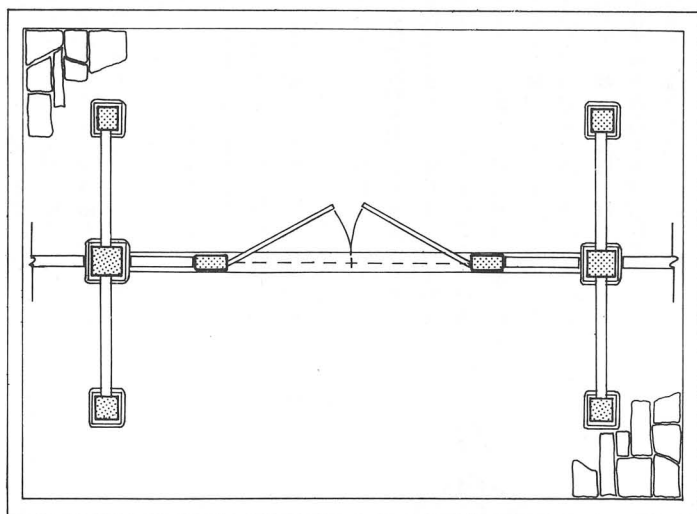
妥当であり、謎が深まる。

大泉寺の総門は寺伝によると享保年間に「移築」されたものであるとされるが、その由緒を明確に記した史料は大泉寺にも見つからないという。永慶寺総門を大泉寺が譲り受けていたとするならば、前述の『佛殿重興募化牒』に仏殿とならんで総門を寄進されたと記述していないのは奇妙である。では『佛殿重興募化牒』が作成されたより後に総門が寄進されたのだろうか。あるいは、全く違う建築の移築なのだろうか。

総門の歴史的な状況を追うと、前述の『甲斐国志』中記載には仏殿とともに境内建築の一として挙げられており、「惣門 二間横一丈額ハ万年山ノ三字間道霈ノ書」とある。二間横一丈という建物の規模は現状のものと一致しないが、二間横二丈ならば寸法が合う。『甲斐国志』中の記載が現在の総門とは異なる建物をさすと考える



写真13 大泉寺総（惣）門



貫穴3  
 貫穴3 ▶  
 ▲  
 上部横架材1 他

貫穴2  
 ▼  
 上部 貫穴1  
 ▲  
 貫穴2

貫穴1 ▶ 貫穴1  
 ▲  
 小穴1

貫穴1 腰掛け蟻  
 ▼  
 貫穴大小各1  
 木舞7 (2次)

貫穴2  
 ▼  
 横架材 上部束貫穴1 ▶ 上貫穴1 貫穴2  
 ▲  
 貫穴2

貫穴1 ▶ 貫穴2  
 ▲  
 小穴1

図6 大泉寺総門 平面図および痕跡図

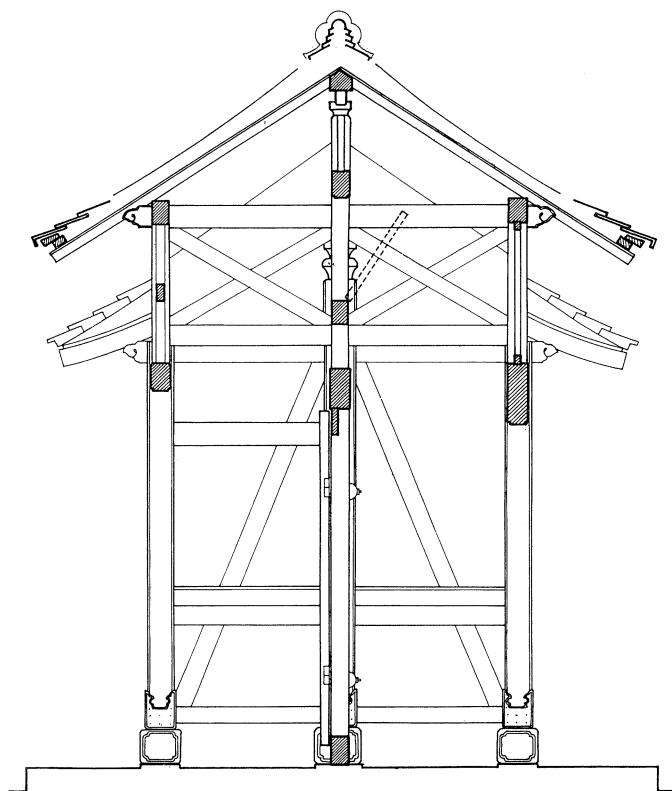
よりも、まず数字に関する誤記を疑うべきであろう。扁額については記載と同じものが現在も総門に掛けられている。

次に文政十年の『大泉寺縁起略記』には前述のとおり「惣門」として現在と同じ姿が描かれている。

昭和五十六年に山梨県の近世社寺建築調査が行われ、すでに調査報告書<sup>10</sup>が刊行されている。大泉寺惣門は第三次調査の対象とされ、報告書の解説によると、黄檗宗寺院の門に見られる形式であり貴重な遺構であることが述べられている。だが柳沢吉保造営の永慶寺からの移築であった可能性にはまったく触れず、再建の時期も享保一年から二十一年までの全期間が対象とされており、同九年の永慶寺破却を考慮した期間に限定していない。しかしながら、山梨県全域の寺社建築における相対的な様式の位置づけがなされるなど注目すべき内容が述べられている。ここにその一部を引用してみよう。

「（門の）部材には種々の痕跡を見出すが、相互に対応するような痕跡ではない。また、様式的には享保期が至当なので、古材を用いて建築したと考えた方がよい。」

筆者はこの指摘に従い、大泉寺総門に



おける部材の痕跡と建築上の特徴を調査した。写真とともに平面図および梁行断面図を図6・7に掲げ、参考のため萬福寺総門桁行・

図7 大泉寺総門 梁行断面図

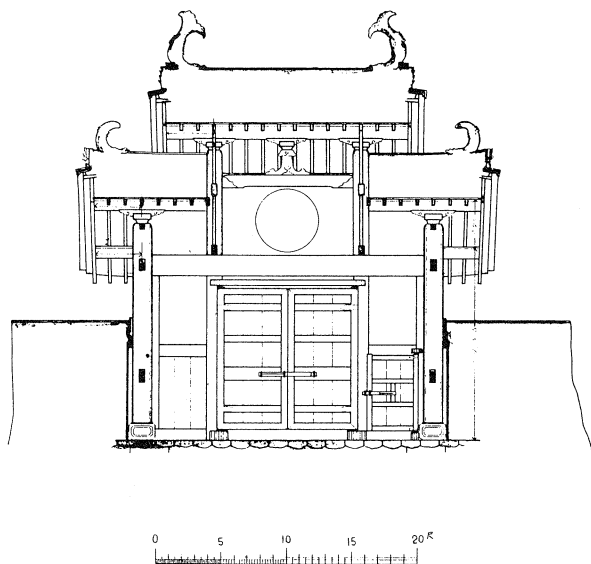


図 8 萬福寺總門桁行断面図

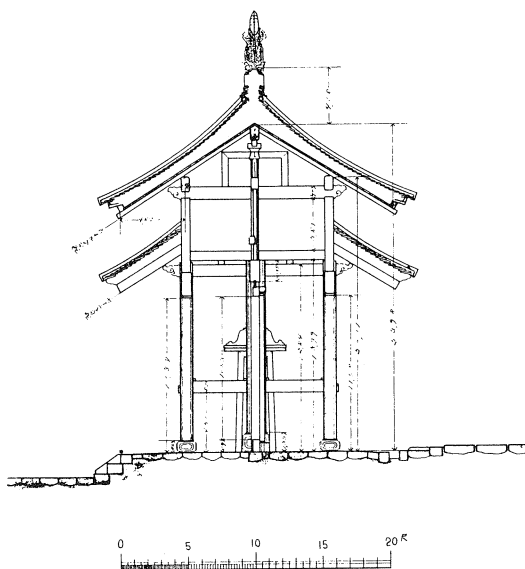


図 9 萬福寺總門梁行断面図

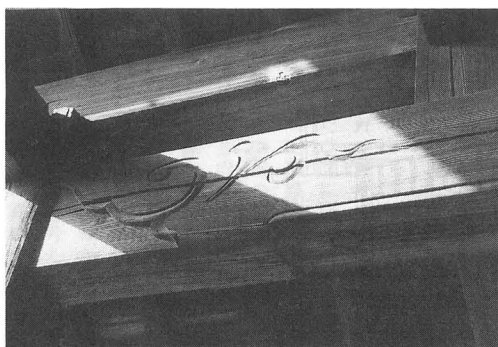


写真15 大 虹 梁



写真16 蟬股と実肘木

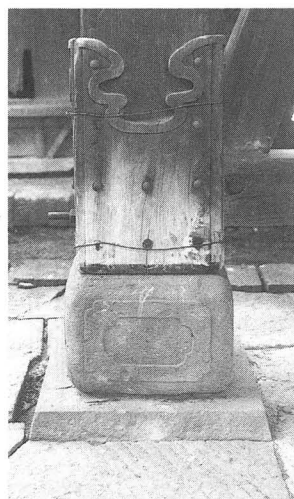


写真14 礎 石

梁行断面図を図8・9に示す。

まず目につくのが柱下に使用された礎石(写真14)である。これは前述のように『佛殿重興募化牒』の仏殿の図に描かれた柱礎石の意匠ときわめて似ており、また現在萬福寺の各建築において角柱(および方柱)に使用される礎石と同じ意匠のものである。

次に主要な横架材である控柱間の大虹梁(写真15)であるが、これの絵様はすでに『山梨県の近世社寺建築』において十八世紀初期頃と推定されている。またこの虹梁には眉欠きをし、錫杖彫をつけるが、萬福寺の総門の大虹梁には眉欠きのみで錫杖彫をつけないから、この点で異なっている。

柱には、几帳面がつけられ門中央両側のみが偏平な方柱である。中央の屋根の棟木は高い位置の虹梁から板蟬股と実肘木とで支えており(写真16)、「虹梁上棟木間には退化した蟬股様の支えを備えている」萬福寺総門の場合と多少意匠は異なるが、建築的構成は同じである。それと同様に大泉寺では両脇の本柱上に特殊な形態の皿斗つき大斗(写真17)のをせ、さらに実肘木で低い方の屋根棟木を受けるが、萬福寺では皿斗は用いていない。

萬福寺の総門と現状で大きく異なるのは土壁の有無であり、萬福寺では高い屋根と低い屋根との境が上部で壁になるが、大泉寺では材が襻に渡され(後補の筋違か・写真18)、他は素通しのままである。また萬福寺に設けられた円窓は大泉寺にはない。

次に材の痕跡であるが、図に示すように実に多く

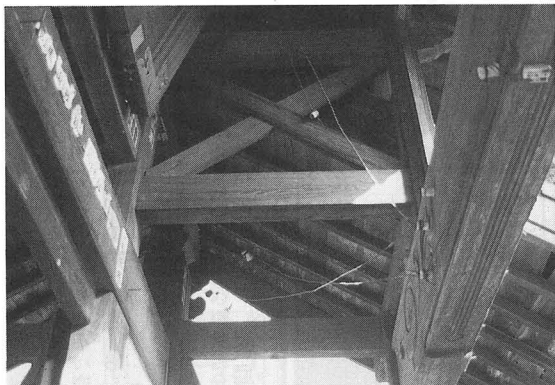


写真18



写真17 皿斗つき大斗

の、しかも並び合う柱どうしで対応しない貫穴状の痕跡が見受けられる。特に門北東の控え柱のみに南面に2次にわたる土壁痕跡が発見できるなど、経緯の推定のつかない不可解な材が存在している。材の痕跡を見る限り、『山梨県の近世社寺建築』に指摘されているように「古材を使用しての再建」とする見解が最も妥当であろうと考えられる。そして「古材」はすべて元来総門であった材料とは限定できない。しかし、建築を構成する諸要素は萬福寺の総門にきわめて近似しており、特に柱礎石は旧永慶寺に使用されていたものと同じ意匠と推定される。従って大泉寺総門は、建築部材を永慶寺の何らかの建物に得た可能性が高いと述べることができる。

甲府城の殿堂建築を始め、柳沢家によって甲府とその近隣に造営された建造物の殆どが失われた現在、当時のよすがを偲ぶ遺構として大泉寺総門はきわめて貴重な存在である。

さて、旧永慶寺伽藍の建築をかつて譲り受けたという伝承をもつ寺院は複数あるようだが、そのうち古府中町、龍華池の北にある禅林院の本堂は現在の建物で当時のものではないかと言われている。同寺の許可を得て、本堂の建築的調査を行った。写真19・20および平面図を図10に、復原図を図11に載せる。

同寺は『甲斐国志』に「普門山禅林院 古府中村日影 臨濟宗東光寺村能成寺ノ末黒印千三百八十五坪」とあるものの、無住の時期もあったようで、寺蔵古文書などの史料には恵まれていない。ただ先代の住職が残した太平洋戦争頃の記録に当時の本堂図面および写真(21)が付されている。これによってその頃の部屋の名称がわかる。仏壇のある仏間を「内陣」と称していたようである。

建築の構成はその「内陣」および「儀式場」・「参拝所」を中心

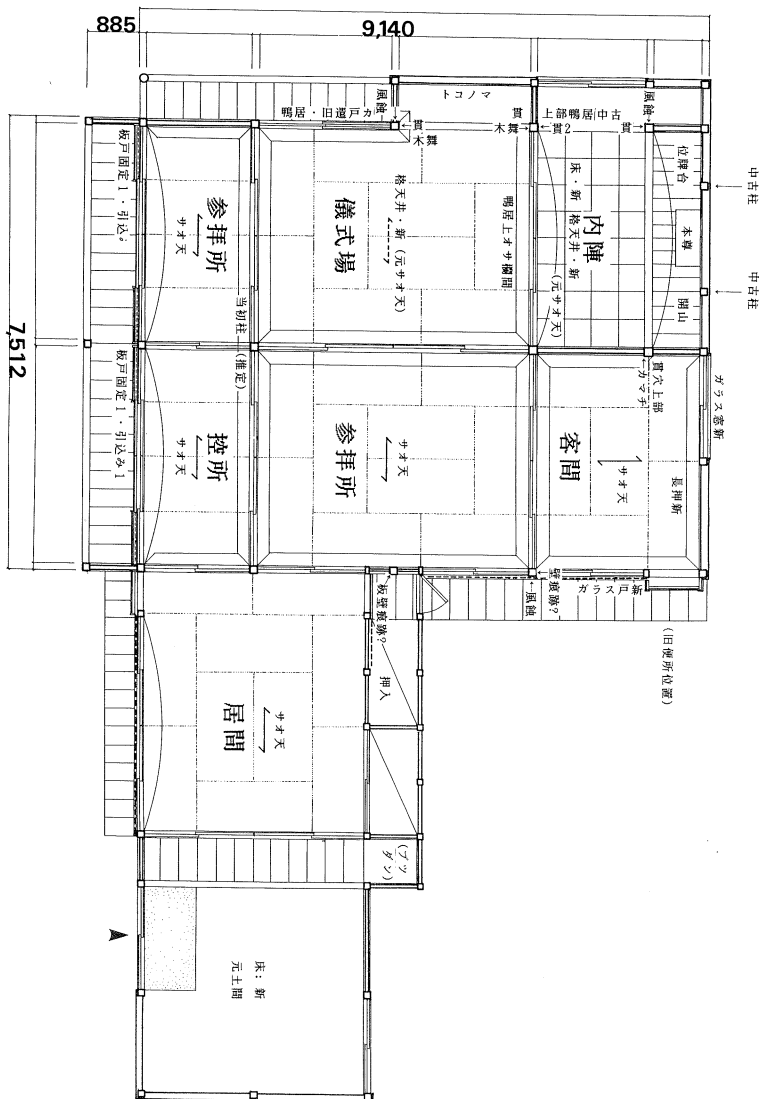


図10 禅林院本堂 現状平面図・附痕跡  
(図中の空々けは土壁跡を示すもの)



とする棟に「居間」の棟、即ち庫裡が付加したL字型をなす。台所と「居間」からなる庫裡の棟は、柱の木割から後世の増築部分ではないかと考えられる。そして本堂の中心部分にもかなり改造の痕跡を見ることが出来る。

本堂は南面して建ち、庫裡棟を除くと現在奥行き3室、横2列の6室で構成されている。「儀式場」・「参拝所」が最も広い空間である。「儀式場」の天井は仏間（「内陣」）とともに昭和五十一年に壇家によって格天井なおされているが、元来は「参拝所」と同じ



写真19 禅林院本堂

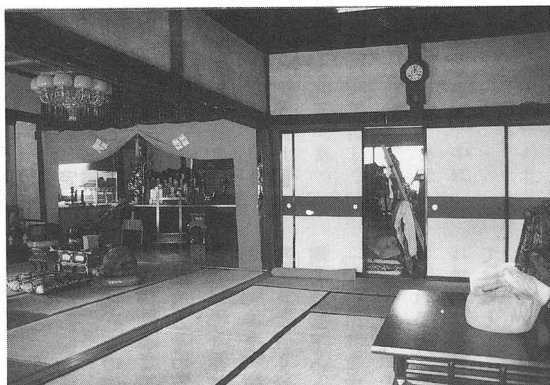


写真20 本堂内部

竿縁天井であった。その2室の南にある4畳の「参拝所」および「控所」は幅一間の畳廊下とでも言うべき空間で、南に縁が付けられているが、縁の造作は新しい。おそらくは破損を修理したのであろう。また「儀式場」の北西すみにある床の間は元来無かったと考えられる。これは床柱に風蝕および貫、木舞の痕跡（写真22）があつてもともと床框の位置が土壁になっており、それより外は軒下の縁だったと推定されるためである。このことは仏間西の部分についても当てはまる。

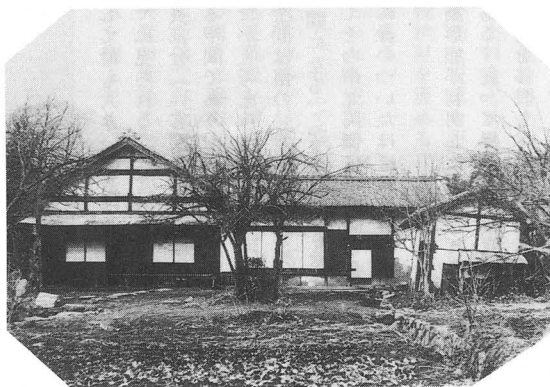


写真21 太平洋戦争頃の外觀

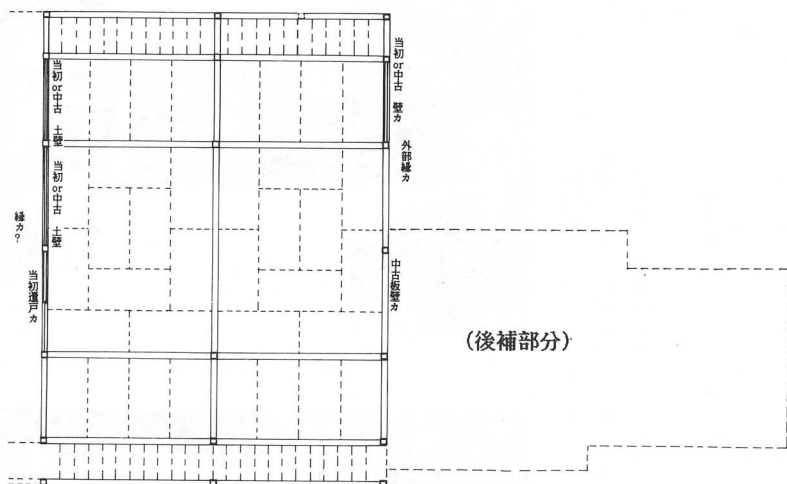


図11 禅林院本堂 推定復原図

さて、この建築に関して最も大きい改造は北の2室、仏壇のある「内陣」および「客間」に見られる。本堂の北側幅半間の部分、即ち仏壇とその東への延長部分（「客間」の北側幅半間分）とは柱の状態から下屋に相当する空間であり、当初は本堂南側と同じ縁側状のしつらえではなかったかと考えられる。「内陣」と「客間」とに残された各4畳ずつの空間は南の「参拝所」および「控所」と全く同じ畳廊下のような空間になる。つまりこの6室は、「儀式場」「参拝所」を中心としてその南北両側に幅1間の畳廊下、もしくは前室、さらにその両側に縁のついたほぼ対称形の建物であったと推察されるのである。

このように当初の建築形態が判明したが、これは寺院の本堂としては考えにくい平面である。従って禅林院の本堂は、当初寺院本堂ではなかった何らかの建物を移設し、本堂として改造を加えたと考えるのが最も妥当なようである。なお太平洋戦争頃の図面と現状を

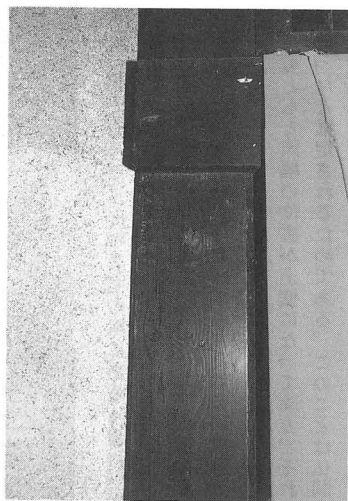


写真22 床柱の土壁痕跡

比較すると、「儀式場」の床の間はすでに設けられており、また南と西の外縁は続いて博縁の表現になっている。そして「客間」の北東側に便所のあったことが判る。

この建物の当初の形態に似た建物を永慶寺の「伽藍配置図」中に探すと、規模は異なるが「寝室」の平面構成がよく似ている。また「方丈」やいくつかの寮舎にも多少類似の平面が見受けられる。

しかしながら、建物部材からの情報を含めて、今筆者が手にしうる史料からは、禅林院本堂が他の何らかの建築からの移築であっても、それが旧永慶寺から受けたものであるかについては断言がたい。

今後建設について記録した古文書や、あるいは建築部材に残された棟札、墨書などの記録がさらに見いだされることになれば、この疑問は解かれるだろう。禅林院では本堂建て替えの計画が話のぼっているという。現本堂の解体によって、墨書などが発見される可能性はある。これからのさらなる研究課題としたい。

## 六 結びにかえて

以上、本稿では柳沢家による永慶寺の造営とその建築について見てきた。近世の黄檗宗寺院といえは萬福寺の他には長崎県の崇福寺等が知られるが、完成した伽藍の典型例に挙げられるのはやはり萬福寺である。柳沢吉保による菩提所、龍華山永慶寺は萬福寺の均整のとれた伽藍配置を範としながらも、方丈、書院、寝室など奥の私的な領域で建築が充実しており菩提寺としての性格をきわだたせている。

秋篠八右衛門の手になっただけに本格的な黄檗建築としての特徴

をもつが、仏殿の移築史料の絵図を見ると斗拱の構成などは比較的小となしい意匠であった可能性がある。

今後、京都秋篠家所蔵史料などから永慶寺関係のものが見つけられれば、さらに建築の詳細な復原を行うことができるだろう。そして現存する建築との比較検討を進めることもできよう。これからの最大のテーマであると考ええる。

永慶寺伽藍を構成していた各建築の行方を追うことは建築史研究者にとり限りなく難しく、そして限りなく魅力的な課題である。

本研究にあたり、池谷寛造氏には貴重な史料を見せていただいた。大泉寺および禅林院は建築調査を御許可下さり、また東京工芸大学の伊藤裕久氏には実際の調査で協力していただいた。柳沢文庫三橋稔夫氏、山梨県立図書館飯田文弥氏、甲府市史編さん室にも史料閲覧、建築調査に際して大変お世話になった。

末筆ながら心から謝意を表したい。

## 注

- (1) 『甲斐路』季刊No.20所収 山梨郷土研究会、昭和四十六年
- (2) 拙稿 「宝永期柳沢家の甲府城殿舎について」 『甲府市史研究 第4号』所収 昭和六十二年十月
- (3) 萬福寺伽藍の各建築については次の修理工事報告書が京都府教育委員会から刊行されており、これらに依拠した。なお本稿中図2、3、4、8、9の各図はそれぞれの報告書から転載したものである。

『重要文化財 萬福寺大雄宝殿・禅堂修理工事報告書』 昭和四十五年三月 (図4)

『重要文化財 萬福寺通玄門ほか修理工事報告書』昭和四十七年十二月(図2・8・9)

『重要文化財 萬福寺東方丈修理工事報告書』昭和五十六年六月

『重要文化財 萬福寺西方丈修理工事報告書』昭和五十八年十二月

『重要文化財 萬福寺天王殿修理工事報告書』昭和六十一年九月(図3)

- (4) 『重要文化財 萬福寺齋堂修理工事報告書』平成元年三月  
『諸色書留』によると宝永七年に悦峯の「龍華山」の額字が届いたおりに、「山門ニ懸」とある。但しこれが的確に三門を指すか否かは不明である。

萬福寺の三門の建設年代は延宝六年(一六七八)現総門が元禄六年(一六九三)であるが、萬福寺伽藍建設の第一期に最初の総門が別に作られており、のちにこの総門は他の場所に移された。

- (5) 萬福寺の秋篠家木割書には他の建物にも「ゑやうひち木つくり」の表現があり、明らかに中備位置に置かれた部材を指している(注(6)参照)。そこで天王殿の「絵様肘木」についても本稿のように解釈した。

しかしながら天王殿の「絵様肘木」は木割書に「大サモ尺貳寸ニ四寸二分」とあり、本論中で解釈した部材より小さいので疑問が残る。天王殿の外廻りの柱にははかに外側へ向かう実肘木を設け、これに絵様を付けている。従ってこちらを指すとする別な解釈も存在しうる。

- (6) 萬福寺の禅堂・齋堂に関する秋篠家木割書にはやはり「ゑやうひち木つくり」の表現がみられる。永慶寺の「伽藍配置図」と同様でこちらには「大斗」の記載がなく、実際の建物の中備を見ると特徴的な雲形束(板斗拱)が使用されている。木割書の内容から禅堂・齋堂の「ゑやうひち木」がこれを指すことは間違いないが、天王殿のものとは形態を異することになる。

- (7) この史料にはそれまでの縁起略記の版木を作り直したものと付記があるが、境内図は文政十年のものと考えられる。

- (8) 山梨日日新聞社 一九七二

- (9) 甲府市市史編さん委員会 昭和六十三年三月

- (10) 『山梨県の近世社寺建築』山梨県教育委員会 昭和五十八年三月 調査、執筆担当は早稲田大学建築史研究室。

(東京職業訓練短期大学校教官 東京都国分寺市)